



筑前琵琶を修復する筆者

日本と私

—筑前琵琶を学び、イタリア演劇を翻訳するまで—

ドリアーノ・スリス

私が日本に来たのは二十七歳のとき。そのときから三十八年も経ってしまったようだ。考えてみるとイタリアでの時間よりも、日本での長い時間のほうが短く感じる。イタリアでの二十七年間から物心がつく十歳までの期間を引くと、わずか十七年間。十七年と三十八年。日本での三十八年間があつという間に過ぎてしまったのはなぜか。習慣、言葉、食べ物、気候などが違う所で暮らすと、子どもに戻ったかのように毎日毎日いろんなことを発見し、嬉しさ、悲しさ、恥ずかしさ、

イライラといった単純な感情が現れ、重なって、訳のわからない気分になる。時の経つのはなんと早いことか！
しかし、時間が経てば経つほど、良い意味でも悪い意味でも、自分の国のすばらしいところ、くだらないところがはっきり見えてしまう。もちろん母国の悪いところは自分だけが批判できる。外から言われてほしくない。まるでわが子のように、文句はたくさん言えるが、外から言われると嫌な気分になり、無理にでも弁護したくなる。

イタリアの文化は日本でよく紹介されているが、よく見ると、あちこち大きく不思議な空白がある。観光、美術、料理、ファッション、車、デザイン、オペラはよく紹介されているが、映画、演劇、文学、漫画、音楽はそれほどでもない。日本人はすごく好奇心が強く、イタリア人の毎日の生活について、ヴェアランスの過ごし方について、教育と医療のシステムの違いといった身近なことをよく聞かれる。こういうことも紹介すると興味深いと思う。

私が日本に来たのは文化的な理由ではない。イタリアで日本人女性と知り合い、愛し、結婚して、妻を通して日本に興味を持ち、この国に来ることを決めた。

来日した翌年、すばらしい出会いがあった。それは琵琶であり、福岡で筑前琵琶をつくられていた福岡県無形文化財の吉塚元三郎氏である。彼を訪ねたとき、昔は琵琶職人がたくさんいたが今は一人になり、弟子はいないと言われた。それを聞いた私は、軽い気持ちで、僕に教えてくれませんかと言った。先生は私の目をじっと見つめ、真剣な顔で「明日、来い」と私に告げた。その一言で私の人生は変わった。

一九七五年から吉塚先生の弟子になったが、当時、日本に来て間もなくだったので、私の日本語は生活するための最低限のもの

だった。毎日、琵琶の作り方と同時に日本語を勉強した。先生が話しているのをメモし、夜、家に帰ってそのメモを見て辞書で調べようとしても調べようがない。「イキヨツタツタイ」とか、「バツテンクサ」という言葉を探しても見つかるはずがない。私は長い間、鋸のことを「ノコッタイ」と思っていた。吉塚先生は明るくてとても良い先生だった。

一九八八年にもう一つ忘れることのできない出会いがあった。私の家に突然訪ねてこられて「わしの琵琶を直してくれ」と言う人がいた。今は亡き琵琶法師の山鹿良之先生であった。人々は目が不自由な人と言っていたが、私はそう思わなかった。ただ目暗（目が暗い）であった。目は見えないが不自由なところはなかった。逆に私たちより良く見えていると感じた。彼の肥後琵琶は自分で筑前琵琶を削り直した独特な楽器であった。

時間があるときは、何度も熊本県玉名市の山鹿先生に会いに行った。もし私が結婚してなく、子どももいなかったら、きっと山鹿先生の弟子になり、一緒にずっと住んでいたと思う。それほど魅力的で存在感のある方だった。

日本で生活し、日本文化が好きになればなるほど、自分の文化を振り返り、日本に来る前より好きになった気がする。そしてイタリア文化センターという大きな名前で、小さな

イタリア語教室を開いた。イタリア語を教えながら、イタリア映画や音楽、美術などを紹介してきたが、私にはある夢があった。それは日本ではまだ不思議なことに知られていない、イタリアのすばらしい人物を紹介したいということであった。

その人物とは、ナポリの演劇王、戯曲作家、演出家、俳優、映画監督、詩人であるエドゥアルド・デ・フィリップポ（一九〇三―一九八五）。イタリア映画に一番影響を与えた芸術家だ。俳優としても出演した舞台を、映画のような撮り方で作られた作品がテレビでも放映され、イタリア、いやヨーロッパでは知らない人はいないほどポピュラーな人物であり、全世界でも高く評価されている。

その彼をなんとか日本で紹介したいと願いながらも、エドゥアルドの劇は文学作品であり、翻訳の段階でだめにしてしまうのではと、ずっと心配でなかなか手をつけることができなかった。やっと数年前、私と同じくエドゥアルドを愛する大西佳弥さんと、台詞をひとつひとつ丁寧に時間をかけて訳し始めた。エドゥアルドへの私の尊敬の念、そして愛情を十分に注ぎたくて現イタリア会館・福岡の中に出版部をつくり、自分たちだけで編集、挿絵、デザインをした。このとき初めて、妻である装丁家・毛利一枝と一緒に本をつくれたのも喜びであった。今年五月に念願のエ



【企画・刊行】
イタリア会館・福岡



●A5変形(240R)・上製・ケース入
●定価:本体4,500円+税
ISBN978-4-9901473-3-4 C0074

ドゥアルド・デ・フィリップポ戯曲集第一巻『デ・プレトローレ・ヴィンツェンツォ』の出版へと至った。この二年間で五作品をシリーズ出版する予定だ。

これからも、琵琶制作や昔のすばらしい琵琶の修復をやりながら、日本で知られていない私のイタリアの紹介に努めていきたいと考えている。

ドリアーノ・スリス

イタリア会館・福岡 館長／琵琶制作・修復師

【略歴】一九四七年イタリア生まれ。ローマ・サンタチェチリア音楽アカデミーでクラシックギターを学ぶ。一九七四年来日。一九八一年イタリア会館・福岡設立。